

次の文章は檜垣立哉『食べることの哲学』の一節である（設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある）。読んで設問に答えよ。

誰もが普段気づいていないことであるが、食べものというのは、ほとんどが「生きたもの」である。このいい方はいささかオブラートにくるんだものであり、実際には塩分やミネラルなどをのぞき、われわれは何かを殺して食べているのである。もちろん、ヴェジタリアンがおり、動物は食べるべきではないという主張がなされることもある。

だが、その場合でも食べてもよいとされる植物もまた生物であることには変わりがない。また多くの食のタブーはこの「殺す」ということにこだわりをもっている。何をどういおうと、われわれは生き物を食べ、そのかぎりですべてを殺している。

とはいえ、よくおわかりのように、とりわけ近代社会においてはみだりに生き物を殺すことを推奨する文化はほぼ存在しない（戦争という重大な例外事例はあるが、この点は措おいておく）。一方では生きているものを殺してはダメだというのは文化の基本的な原則でもある。だが同時にわれわれは日々自分が生きるなかで、大量の動物や、あるいは植物を、やはり殺して食べているのである。現代文明においてはまさに、みえないところでそ

うした殺戮ころしつゝはおこなわれる。これは端的に矛盾ではないか。

すがすがしいまでにこの矛盾を問Aい詰めるのは宮沢賢治である。宮沢は法華経というきわめて戦鬪的な仏教的信仰を背景にもちながら、この問題を小説や童話という仕方で書きつづけた。それは食物連鎖そのものを問う「よだかの星」、あるいは人間もまた食べられる自然であるということ喚起させてくれる「注文の多い料理店」や「なめとこ山の熊」などにおいて明示されていることである。人間は生き物を食べないと自分が死ぬ。しかし、自己の倫理に忠実であれば、そもそも自分が死ねばよいのではないか。宮沢の問いそのものはここにまで達してしまう。これは極限的な「食べない」に通じるものである。

そしてまたこの場合、「ここまでなら食べてよし」「これは食べてはいけない」という問いにむすびつくことも往々にしてある。これもまた文化相対主義が幅をきかせる議論のようにみえる。曰く、日本人は魚を生で食べるが、近年の「スシ」ブーム以前はそのようなことは世界のどこでもだいたい気持ち悪がられた。ムスリムはハラールフードという特定の規則にのっとりた殺し方をした食材しか食べない。インドでは牛は聖なる生き物な

ので食べない、等々。だがこうした議論のそれぞれは、実際にはさして重要ではない。この議論には、あるゼロ点ともいうべき根底がある。それは「人間は人間を食べない」ということである。これはカニバリズムのタブーといわれる。カニバリズムの忌避は、本当に人類に共通なのかという議論があるが、これが「食の下限」を規定していることは事実であろう。そしてそれがゆえに、むしろ人間が人間を食べるということは、さまざまな人類学のなかの（西洋中心的な）「野蛮人」の表象のなかにみうけられることになる。この点については、社会学者である雑賀恵子が、『エコ・ロゴス』（人文書院）という書物で大変啓発的な知見を提示してくれている。食べてよいものと食べてはいけないもの、これは通常は文化的なことと考えられるが、人間を食べることについてはきわめていりくんだ、薄暗い場面という状況にたちいたらなければならぬ。

問 傍線部A「この矛盾」  
とはどのような矛盾か。  
五〇字以内で説明せよ。